

汲古一心

「仏さまたちのお集まり」(一)

中村素堂

こもりくの初瀬と、枕ことばをつけてむかしから美しくうたわれた長谷寺に、今から千三百年も前、天武天皇さまのおいのちを折り、『法華経』見宝塔品のくだりの絵を銅板に鑄出したものが、国宝として珍藏されている。

幅が七十五センチ、高さも八十センチほどの中に、上四分の三が浮き彫り風の絵で、釈迦、多宝二仏と大きく湧出した宝塔が描かれ、その周囲に菩薩や聴聞のお弟子など、なんと千何百体と描かれている。下の四分の一のところには立派な書で願文が彫られているのである。

じーッと見ていると、世尊のお説教を聴聞している方々の感動が胸に伝わってくるようで、信仰の篤い人の作であることもしぜんに判るのである。

ひと所にたくさんのお仏さまやお弟子たちの集まったものというところ、三十三間堂の一千一体の観音さま、あるいは方々の五百羅漢の石像など有名な集団になっているものもあるけれど、現存の日本仏教美術の中で、長谷寺の銅板ほどたくさんのお集まりのものは外にないかと思う。

変なことに感心しているようだが、実は中国にある自然の岩山をくり抜いて作った敦煌とか雲岡とかいう有名な石窟寺院の中で、一番大きな龍門の丘陵側面に営まれた石窟の各寺院にも、これと同じ光景を彫ったものがあり、また他の仏さまや菩薩、お弟子方、仁王さまなどを合わせると約十万にも近い大仏像群が岩の壁に彫られているのである。

これは今から千五百年も前、中国に仏教がとて盛んになってきたころの北魏という国が造り始めて、以来三百年、時に盛衰はあつても唐のころまで彫りつづけたもので、その壮大さには実に驚かされる。

そしてこの石仏の大群の約半分弱のものは、長谷寺の銅板と同じようにその仏さまの左右か下に、それはそれはみごとな字でこれ縁にして父母兄弟あるいは妻子の幸福を祈ったり、眷属の冥福を願ったり、大きくは国家、帝王のために念じたり、信仰のまことから出る人間愛の美しいことばが次から次へと刻まれているのである。

大きいのは奈良の大仏ほどもあるものから、小さいのは十センチほどの小像まで大小十萬、壁という壁から天井まで、上下に重なり左右に並び美しいお厨子におられるものもあり、また素朴な仕切りのひとこまに入っているものもあつて、行けども行けども尽きない。

つまりこの龍門一画の石像各寺院に十萬体ものお住まいとなれば、やはり今日の都会のように、仏さまにも高級なマンションの方もありアパートの方もあり、下宿、同居などもおありになるのかと千何百年もたつてやつとわれわれ人間も龍門の仏さまに追いついて石像の小さい仕切りをして、上へ上へと重なつて住むようになったなど苦笑される。

だがそれでいてわれわれと大変違うことは、そのひしめき合うようにおられる大ぜいの仏さまは、丘陵の下を流れる黄河の支流と相對して窓からの光りや露坐で陽に照らされつついかにも静寂なご風貌であられ、ここに立っていると騒がしい気持ちなんかみんない石の仏さまに吸われてしまうようであり千古の清浄境という感じがひしひしと心にしみてくることである。

アパートに住む者同志で会を作りその会の名が蜂の巣会というのを知っている。さわることもできない賑やかさ煩わしさが匂い出ている名である。この騒然たる都会の雑音と臭気の中に立つて、ふと龍門の仏さまの大アパートの静けさを思い出し、そしてそこに刻まれている信仰の深い人々のあたたかい願いのことば、美しい文字などを想いおこす。(つづく)

〔光明〕昭和四十二年九月

『筆間雜記』中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。